

(案)

動物用医薬品評価書

オキシベンダゾール

2008年7月

食品安全委員会動物用医薬品専門調査会

確認評価部会

目次

	頁
○審議の経緯	2
○食品安全委員会委員名簿	2
○食品安全委員会動物用医薬品専門調査会専門委員名簿	2
○食品安全委員会動物用医薬品専門調査会確認評価部会委員名簿	3
○要約	4
I. 評価対象動物用医薬品の概要	5
1. 用途	5
2. 有効成分の一般名	5
3. 化学名	5
4. 分子式	5
5. 分子量	5
6. 構造式	5
7. 使用目的及び使用状況等	5
II. 安全性に係る知見の概要	6
1. 吸収・分布・代謝・排泄試験	6
(1) 薬物動態試験	6
(2) 残留試験	6
2. 急性毒性試験	7
3. 亜急性毒性試験	7
4. 慢性毒性及び発がん性試験	7
5. 生殖発生毒性試験	8
(1) 周産期及び授乳期投与試験（ラット）	8
(2) 催奇形性試験（器官形成期投与試験、ラット）	8
(3) 催奇形性試験（マウス）	8
(4) 催奇形性試験（羊、牛及び馬）	8
6. 遺伝毒性試験	8
III. 食品健康影響評価	9
1. ADIの設定について	9
2. 食品健康影響評価について	9
・表 3	11
・別紙 1	12
・参照	13

〈審議の経緯〉

2007年 7月 13日 厚生労働大臣より残留基準設定に係る食品健康影響評価について要請（厚生労働省発食安第0713007号）
2007年 7月 17日 関係書類の接受
2007年 7月 19日 第199回食品安全委員会（要請事項説明）
2008年 7月 16日 第7回動物用医薬品専門調査会確認評価部会

〈食品安全委員会委員名簿〉

(2006年12月21日から)

見上 彪 (委員長) * : 2007年2月1日から
小泉 直子 (委員長代理*) ** : 2007年4月1日から
長尾 拓
野村 一正
畑江 敬子
廣瀬 雅雄**
本間 清一

〈食品安全委員会動物用医薬品専門調査会専門委員名簿〉

(2007年9月30日まで)

三森 国敏 (座長)
井上 松久 (座長代理)
青木 宙 寺本 昭二
明石 博臣 長尾 美奈子
江馬 眞 中村 政幸
小川 久美子 林 眞
渋谷 淳 平塚 明
嶋田 甚五郎 藤田 正一
鈴木 勝士 吉田 緑
津田 修治

(2008年3月31日まで)

三森 国敏 (座長)
井上 松久 (座長代理)
青木 宙 寺本 昭二
今井 俊夫 頭金 正博
今田 由美子 戸塚 恭一
江馬 眞 中村 政幸
小川 久美子 林 眞
下位 香代子 山崎 浩史
津田 修治 吉田 緑
寺岡 宏樹

(2008年4月1日から)

三森 国敏 (座長)
井上 松久 (座長代理)
青木 宙 寺本 昭二
今井 俊夫 頭金 正博
今田 由美子 戸塚 恭一
江馬 眞 中村 政幸
小川 久美子 林 眞
下位 香代子 山崎 浩史
津田 修治 吉田 緑
寺岡 宏樹

〈食品安全委員会動物用医薬品専門調査会確認評価部会専門委員名簿〉

(2007年9月30日まで)

三森 国敏 (座長)
林 真 (座長代理)
渋谷 淳
嶋田 甚五郎
鈴木 勝士
寺本 昭二
平塚 明

(2008年4月22日まで)

三森 国敏 (座長)
林 真 (座長代理)
井上 松久
今井 俊夫
津田 修治
寺本 昭二
頭金 正博

(2008年4月23日から)

三森 国敏 (座長)
井上 松久 (座長代理)
今井 俊夫
津田 修治
寺本 昭二
頭金 正博
能美 健彦

要約

1
2
3
4
5
6

ベンズイミダゾール系の広域スペクトル寄生虫駆除剤である「オキシベンダゾール」(CAS No. 20559-55-1)について、各種評価書等(EMEA レポート等)を用いて食品健康影響評価を実施した。

以下、部会了承後作成

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

I. 評価対象動物用医薬品の概要

1. 用途

寄生虫駆除剤

2. 有効成分の一般名

和名：オキシベンダゾール

英名：Oxibendazole

3. 化学名

CAS(20559-55-1)

英名：(5-Propoxy-1*H*-benzimidazol-2-yl)carbamic acid methyl ester

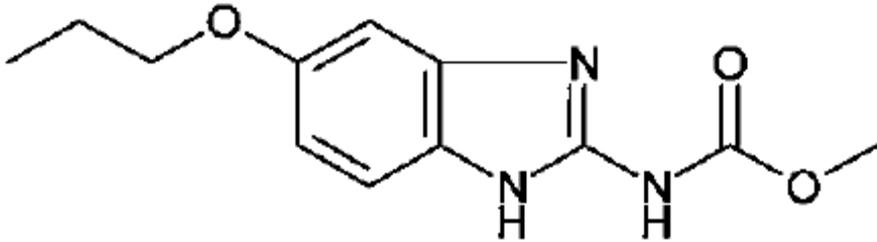
4. 分子式

$C_{12}H_{15}N_3O_3$

5. 分子量

249.27

6. 構造式



21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

7. 使用目的及び使用状況等

オキシベンダゾールはベンズイミダゾール系の広域スペクトル寄生虫駆除剤で、豚、牛、羊、馬を含む様々な動物種の消化管内線虫の成虫及び幼虫に対し用いられてきた。現在オキシベンダゾールの使用は豚に限られ、体重約 30 kg の離乳期や育成期の子豚に 15 mg/kg 体重の用量で単回経口投与、あるいは 40 mg/kg 飼料/日の割合 (2 mg/kg 体重/日相当) で 10 日間混餌投与される。(1)-1,(2)-1,2

わが国においては、オキシベンダゾールを含有する動物用医薬品は承認されていない。

1 なお、ポジティブリスト制度導入に伴う残留基準値¹が設定されている。

3 II. 安全性に係る知見の概要

4 本評価書は、EMEA レポート（年号不明⁽¹⁾、1997 年⁽²⁾）（参照 1、2）をもとに毒
5 性に関する主な知見を整理したものである。

7 1. 吸収・分布・代謝・排泄試験

8 (1) 薬物動態試験

9 経口投与された場合、オキシベンダゾールは速やかに吸収される。羊において投
10 与後 6 時間以内に C_{max} に達する。投与量の多く（牛では 42%まで）は尿中に排泄
11 される。⁽¹⁾⁻⁷

12 不完全な試験内容ではあるが、代謝試験結果からオキシベンダゾールは肝臓にお
13 いて速やかに代謝され、アイソトープ試験により肝臓及び腎臓で検出される放射活
14 性の大部分はオキシベンダゾールの構造を有さないことが示唆されている。

15 ^{(1)-7,(2)-11}

17 (2) 残留試験

18 ① 残留試験（組織）

19 牛、羊、豚及び馬における残留試験において組織中残留は速やかに低下すること
20 が示されている。通常、筋肉及び脂肪における総残留濃度は投与 4 日後には 0.1
21 mg/kg 未満になる。肝臓及び腎臓における残留濃度はより高くなるが、投与 7 日後
22 には 0.1 mg/kg 未満となる。⁽¹⁾⁻⁸

24 豚を用いた ¹⁴C 標識オキシベンダゾールの単回経口投与試験（15 mg/kg 体重）及
25 び ¹⁴C 標識オキシベンダゾールの 10 日間混餌投与試験（40 mg/kg 飼料；2 mg/kg
26 体重/日相当）が実施され、組織中残留濃度が速やかに低下することが示された。

27 総残留濃度は単回経口投与後の方が反復投与後より高かった。単回経口投与及び
28 反復投与の投与 48 時間後におけるオキシベンダゾールの平均組織残留濃度は、そ
29 れぞれ肝臓：3,160 及び 3,000 µg eq/kg、腎臓：398 及び 68 µg eq/kg、皮膚：395
30 及び 85 µg eq/kg となり、筋肉及び脂肪においては 100 µg eq/kg 未満となった。⁽²⁾⁻¹²

32 肝臓における ¹⁴C-オキシベンダゾールの残留量は、投与 24 時間後には 投与量放射
33 活性の 34.5 %、投与 7 日後にはわずかに 投与量放射活性の 10.5 %が検出された。

34 ⁽²⁾⁻¹³

¹ 平成 17 年度厚生労働省告示第 499 号によって新たに定められた残留基準値

1
2 豚に ^{14}C -オキシベンダゾールを投与 (15 mg/kg 体重) し、投与 24 時間後及び投
3 与 7 日後にと殺して得られた肝臓試料から調整された粉末肝臓をラットの飼料に混
4 入した。その結果、~~凍結乾燥肝臓中の~~ ^{14}C -オキシベンダゾールを経口摂取した場合
5 は後での 90% がラットに取り込まれるものとは異なり、肝臓試料から調整された
6 粉末肝臓をラットの飼料に混入した場合、豚の肝臓中の放射活性の残留の内、最大
7 40% がラットに取り込まれることがでは利用可能であることが示された。(2)-14
8

9 残留している総放射活性物質の大部分は肝臓ホモジネート中に存在する。肝臓に
10 において、総放射活性に対するオキシベンダゾール (未変化体) の割合は、投与 2 日
11 後において 1% と評価されている。腎臓においてもこの割合は肝臓と同様であるが、
12 筋肉においては未変化体オキシベンダゾールが残留の大部分であった。(2)-15
13

14 ② 残留試験 (乳汁)

15 牛の乳汁中残留試験において、残留物は速やかに消失することが示唆され、残留
16 物はアイソトープ法によってのみ検出可能である。(1)-8
17

18 2. 急性毒性試験(1)-2,(2)-3

19 経口投与による本化合物の急性毒性は低く、げっ歯類において通常 LD_{50} は 10
20 g/kg 体重を上回る。家畜においては、耐許容量は 300 mg/kg 体重を上回る。
21

22 3. 亜急性毒性試験

23 98 日間亜急性毒性試験 (ラット及びイヌ) (1)-3,(2)-4

24 ラット及びイヌを用いた 98 日間亜急性毒性試験(両被験動物種に対する投与量:0、
25 3、10、30 mg/kg 体重/日、投与経路不明)が実施され、ラットの試験においてのみ
26 血液に対する影響が認められた。観察された変化はわずかなものではあったが、最小
27 用量 (3 mg/kg 体重/日) においても有意差が認められた。投与 1 ヶ月後において Ht
28 値に有意差が認められたが、これらの値は正常値の範囲内 (36~55%) であった。さ
29 らに関連する臨床症状 (粘膜の蒼白、虚弱、虚脱、運動耐容能低下活動減退、食欲不
30 振、心拍数及び呼吸数の増加等) は認められなかったため、Ht 値の低下はオキシベ
31 ンダゾールの投与に起因するものではないと考えられた。MCV 及び MCHC などの
32 より詳細な血液学的指標は、対照に対して有意差は認められなかった。したがって、
33 NOAEL は 30 mg/kg 体重/日と考えられた。
34

35 4. 慢性毒性及び発がん性試験 (2)-9

36 慢性毒性試験及び発がん性試験は実施されていない。

1
2 **5. 生殖発生毒性試験**

3 2 世代繁殖毒性試験の代わりに FDA の III 節試験が行われているが、交配前及び妊
4 娠初期投与試験は実施されていない。

5 **(1) 周産期及び授乳期投与試験 (ラット) (2)-6**

6 ラットを用いたオキシベンダゾールの経口投与試験 (0、30、60、120 mg/kg 体
7 重/日を妊娠 16 日から授乳 21 日まで投与) が実施された。120 mg/kg 体重/日投与
8 群において哺育児に眼瞼開裂及び切歯萌出の遅延が認められた。NOAEL は 60
9 mg/kg 体重/日であると考えられた。

10
11 **(2) 催奇形性試験 (器官形成期投与試験、ラット) (2)-5**

12 ラットを用いたオキシベンダゾールの経口投与試験 (試験 A:0、1、3、10、30 mg/kg
13 体重/日を妊娠 6~15 日に投与、試験 B:0、25、150 mg/kg 体重/日を妊娠 6~15 日
14 に投与) が実施された。~~いずれも催奇形性は誘発されなかった。~~胚・胎児毒性のみ
15 が 150 mg/kg 体重/日投与群において認められた。これらの試験における NOAEL
16 は 30 mg/kg 体重/日であると考えられた。

17
18 **(3) 催奇形性試験 (マウス) (2)-5**

19 マウスを用いたオキシベンダゾールの経口投与試験 (0、1、3、10、30 mg/kg 体
20 重/日を妊娠 6~15 日に投与) が実施され、母動物、新生児のいずれにも毒性影響は
21 認められなかった。NOAEL は 30 mg/kg 体重/日であると考えられた

22
23 **(4) 催奇形性生殖発生毒性試験 (羊、牛及び馬) (2)-7**

24 羊、牛及び馬を用いた生殖発生毒性試験が実施された。いずれの試験においても、
25 催奇形性及び胚・胎児毒性は認められなかった。

26
27 **6. 遺伝毒性試験**

28 オキシベンダゾールに対する遺伝毒性試験として *in vitro* 試験 3 種 (Ames 試験、
29 突然変異試験(L5178Y TK+/-マウスリンフォーマ細胞)、染色体異常試験(チャイニー
30 ズハムスター卵巣由来細胞(CHO 細胞))、と *in vivo* 試験 1 種 (小核試験(マウス)) が
31 実施され、いずれも陰性であった。(表 1) (2)-8

32 遺伝毒性が認められなかったため発がん性試験は実施されなかった。(1)-5

33 表 1. *in vitro* 試験

試験	対象	<u>用量投与量</u>	結果
Ames 試験	菌種不明	不明	陰性
突然変異試験	マウスリンフォーマ細胞	不明	陰性

	(L5178Y TK+/-)		
染色体異常試験	チャイニーズハムスター 卵巣由来細胞 (CHO 細胞)	不明	陰性 ^{a)}

1 a) 10 µg/mL以上の濃度 (+/-S9) において倍数性が認められた。

2

3 表 2. *in vivo* 試験

試験	対象	用量投与量	結果
小核試験	マウス(細胞種類不明)	不明	陰性

4

5

6 Ⅲ. 食品健康影響評価

7 1. ADI の設定について

8 オキシベンダゾールは慢性毒性/発がん性試験は実施されていないが、生体にとって
9 特段問題となる遺伝毒性を示さないと考えられることから、追加の安全係数を加える
10 ことによって ADI を設定することが可能であると判断された。

11 EMEA では、ラット及びイヌを用いた 98 日間亜急性毒性試験で得られた NOAEL
12 30 mg/kg 体重/日に安全係数として通常の 100 に加えオキシベンダゾールが倍数性を
13 誘導したことから追加係数 5 を適用して、安全係数を 500 とし、毒性学的 ADI を 0.06
14 mg/kg 体重/日 (3.6 mg/ヒト/日) として~~い~~ている。(2)・10

15 ~~EMEA では、最高用量 (30 mg/kg 体重/日) でも投与の影響が認められなかった 98~~
16 ~~日間亜急性毒性試験により、NOAEL を 30 mg/kg 体重/日としている。が、毒性試験~~
17 ~~において、最も用量の低いところで投与の影響が認められたと考えられる指標は、ラ~~
18 ~~ットの催奇形性試験における胎児毒性で、NOAEL は 25 (30と思われる) mg/kg 体~~
19 ~~重/日であった。~~ ADI の設定に当たっては、EMEA と同様にラット及びイヌを用いた
20 98 日間亜急性毒性試験で得られた NOAEL 30 mg/kg 体重/日を ~~この NOAEL を~~用い
21 ることとし、安全係数は、種差 10、個体差 10 に、慢性毒性/発がん性試験が実施され
22 ていないこと、生殖毒性試験が不足していること及び染色体異常試験において倍数性
23 を誘導したことを考慮して、追加の安全係数 10 を適用し、安全係数 1,000 とするこ
24 とが望ましいと考えられる。

25 このことから、オキシベンダゾールの ADI としては、NOAEL 30 mg/kg 体重/日に
26 安全係数 1,000 を適用し、0.03 mg/kg 体重/日と設定することが適当であると考えら
27 れる。

28

29 2. 食品健康影響評価

30 以上より、オキシベンダゾールの食品健康影響評価については、ADI として次の値
31 を採用することが適当と考えられる。

1
2
3
4
5

オキシベンダゾール 0.03 mg/kg 体重/日

暴露量については、当評価結果を踏まえ暫定基準値の見直しを行う際に確認することとする。

1 表 3. EMEA における各試験の無毒性量

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日)
ラット イヌ	98 日間 亜急性毒性試験	0、3、10、30	30 (ラット、イヌ) 毒性影響なし
マウス	催奇形性試験	0、1、3、10、30	30 毒性・催奇形性：なし
ラット	催奇形性試験	A : 0、1、3、10、30 B : 0、25、150	30 150 で胎児毒性 催奇形性：なし
ラット	周産期及び授乳期投 与試験	0、30、60、120	眼瞼開裂、切歯萌出開眼、 生歯の遅延
羊、牛、 馬	生殖発生毒性試験	不明	— 胚 ・胎児毒性・催奇形性： なし
毒性学的 ADI		0.06 mg/kg 体重/日 NOAEL:30 mg/kg 体重/日 SF:500	
毒性学的 ADI 設定根拠資料		ラット及びイヌの 98 日間亜急性毒性試験	
ADI		0.06 mg/kg 体重/日	

2

3

1

<別紙1 検査値等略称>

略称	名称
ADI	一日摂取許容量
CHO	チャイニーズハムスター-卵巣由来細胞株
C _{max}	最高濃度
EMA	欧州医薬品庁
LD ₅₀	半数致死濃度
MCHC	平均赤血球ヘモグロビン濃度
MCV	平均赤血球容積
NOAEL	無毒性量
NOEL	無作用量

2

1 <参照>

2 1 EMEA : COMMITTEE FOR VETERINARY MEDICAL PRODUCTS,
3 OXIBENDAZOLE SUMMARY REPORT(1)

4 2 EMEA : COMMITTEE FOR VETERINARY MEDICAL PRODUCTS,
5 OXIBENDAZOLE SUMMARY REPORT(2), 1997